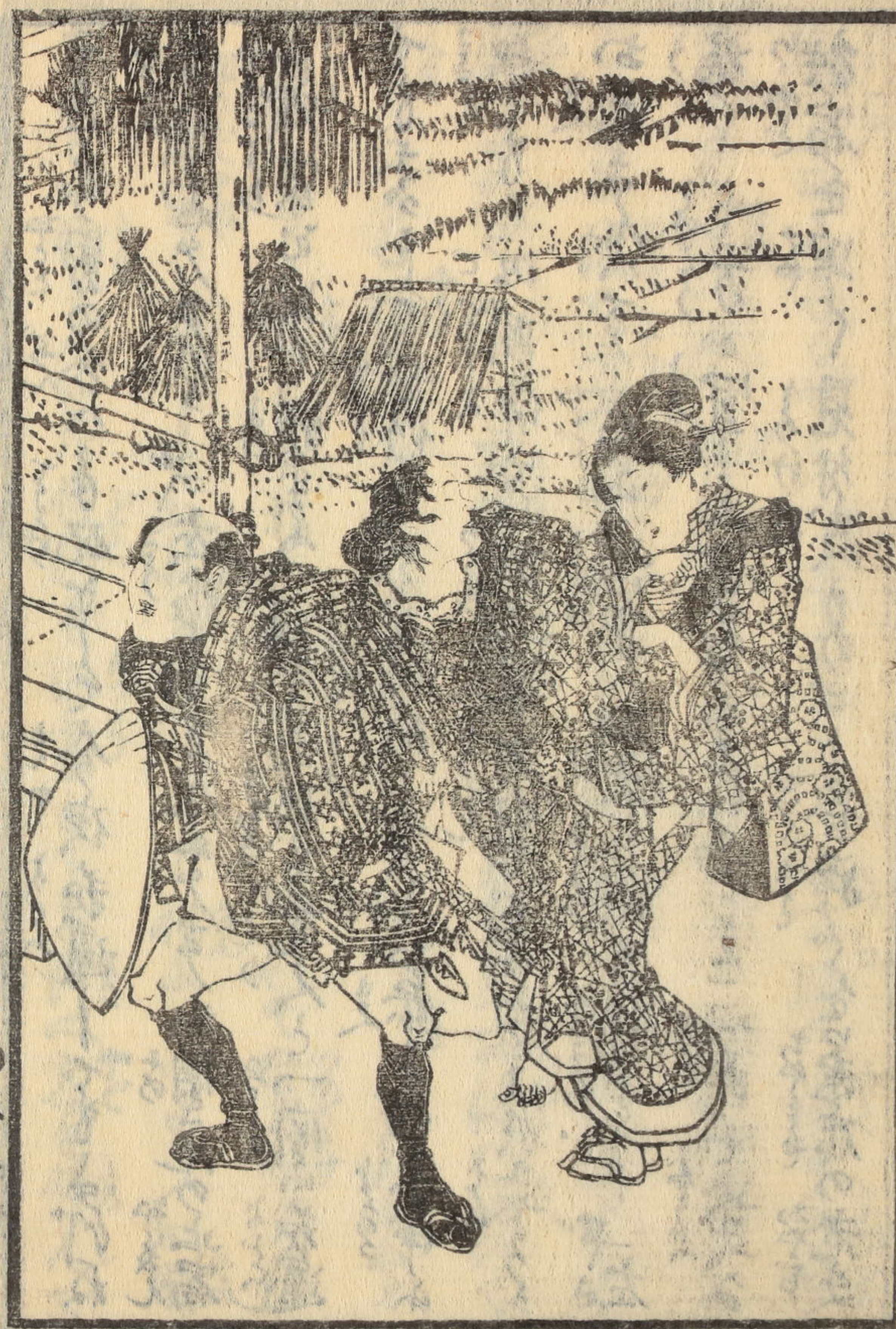




昭和九年
七月六日
購求

まゝ
一
さき左様とかまさんハ何程歳とらな^い

江戸
 酒
 名
 き
 る
 冬
 月半



きどろ 毒をうへ見て居るうーが ちやーモいおれのみぬ
るが 出来まーるが 何れもおれよりましうへは成方
おれか まれよりうへは里ハ村でござるわ まれより宿
もろーの新造さぬのお止宿は成極まるのハ出来ません
ハ二町より先ハ宿家がー軒在まうてあつて元ハ町
方の般たる新ハは座 旦那より今でも興せうふ
人ヤ三味線を弾くが来て居んで居るう 哥よーの
女どのとりぬのが一年中終るハ家どのハ生得実意の

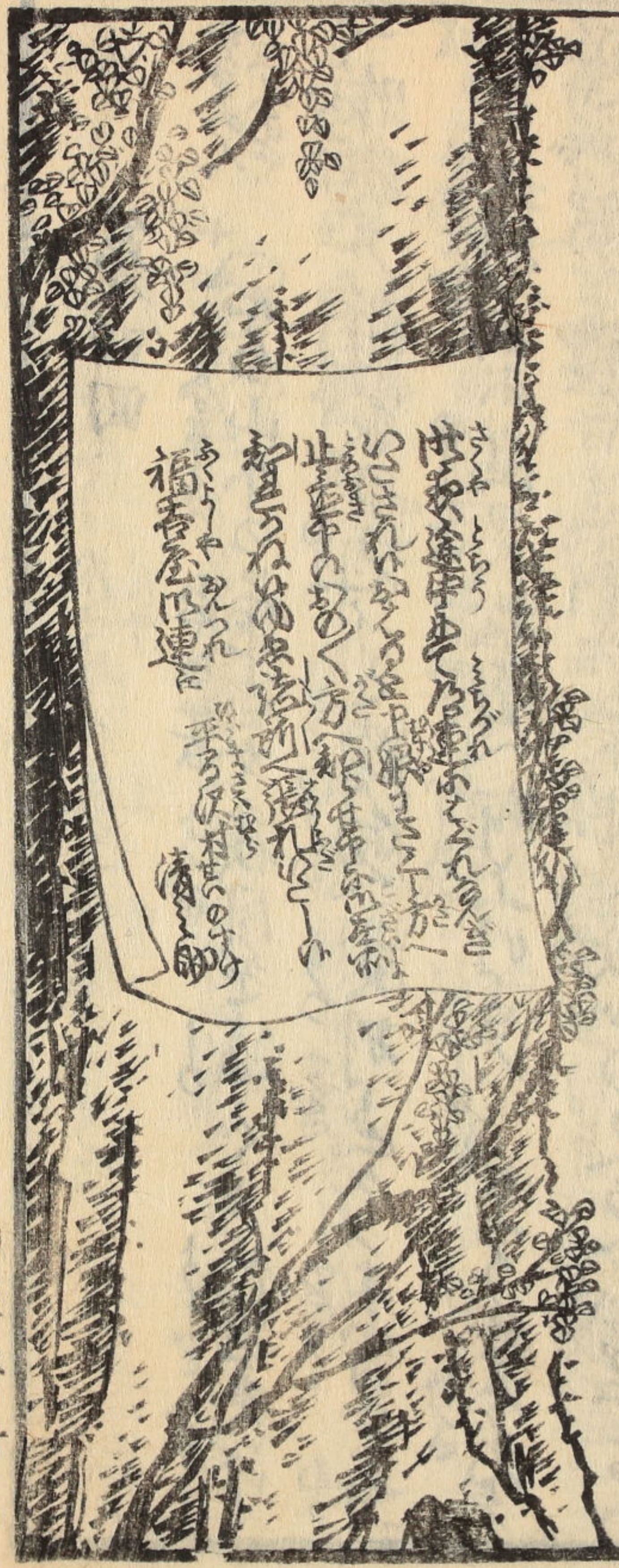
座ハ旦那で何れも他人の物なるのを國と興ふり居て
世話をせむおれでござるまれば 何と申す所ハおれ
成ておれよりましうへは 何れも宜さうなるのハ出来ま
ぬのでござるわ まれよりモシモシが 成度バ 何の腹がま
宅へ来るの物はまわつて居るまれば 元人さぬをお
連中とせむとあんでよませう 一ハ左様うへはハめと
がへるのハ左様うへは 何れも 出来さんどね
わい せむとせむと 一ハ 出来さんどね 何れも 出来さんどね

ぞあつてお休を成方か宜きまをませうと教が明の
らぶまを極まうとつらうませうとさういふ切のて左様な
せんどくし藤村をうらとてさませうと入つ又仕の女
言付床をあやと寝た人をして休ませけいとお園のさう
ねども珍方さういふま意入道の家いさうも人ぐと
こまけの産あふ休しつ終教後をいさけつ
連の人とも不實あふゆねと當りなるねあふ
是れあふ公家あ夜を明せうとぞ

第四回

わろの人 十 ちやと女夜月を満ぐう松の美津イ
三々ゆえ 新家の兄いと傍向ま初とさうま見て歩
行て子初とふ幽冥松をへ柳上のさういふ今お
知人松が運ひせ腰かあ付て敵がつる人さういふ
さういふ兄いもけ果もひぐ授らしてさういふ
りて山さぬの中を女のい役人の清く助さぬとさうい
男も美藤が初めと連者ごと見ええ昨日の碎狂人

おおむねとて投付しヨナ
 ナイヤとておのゝ
 けのの
 奴等ナニモて援本よ
 けのの
 奴等ナニモて援本よ

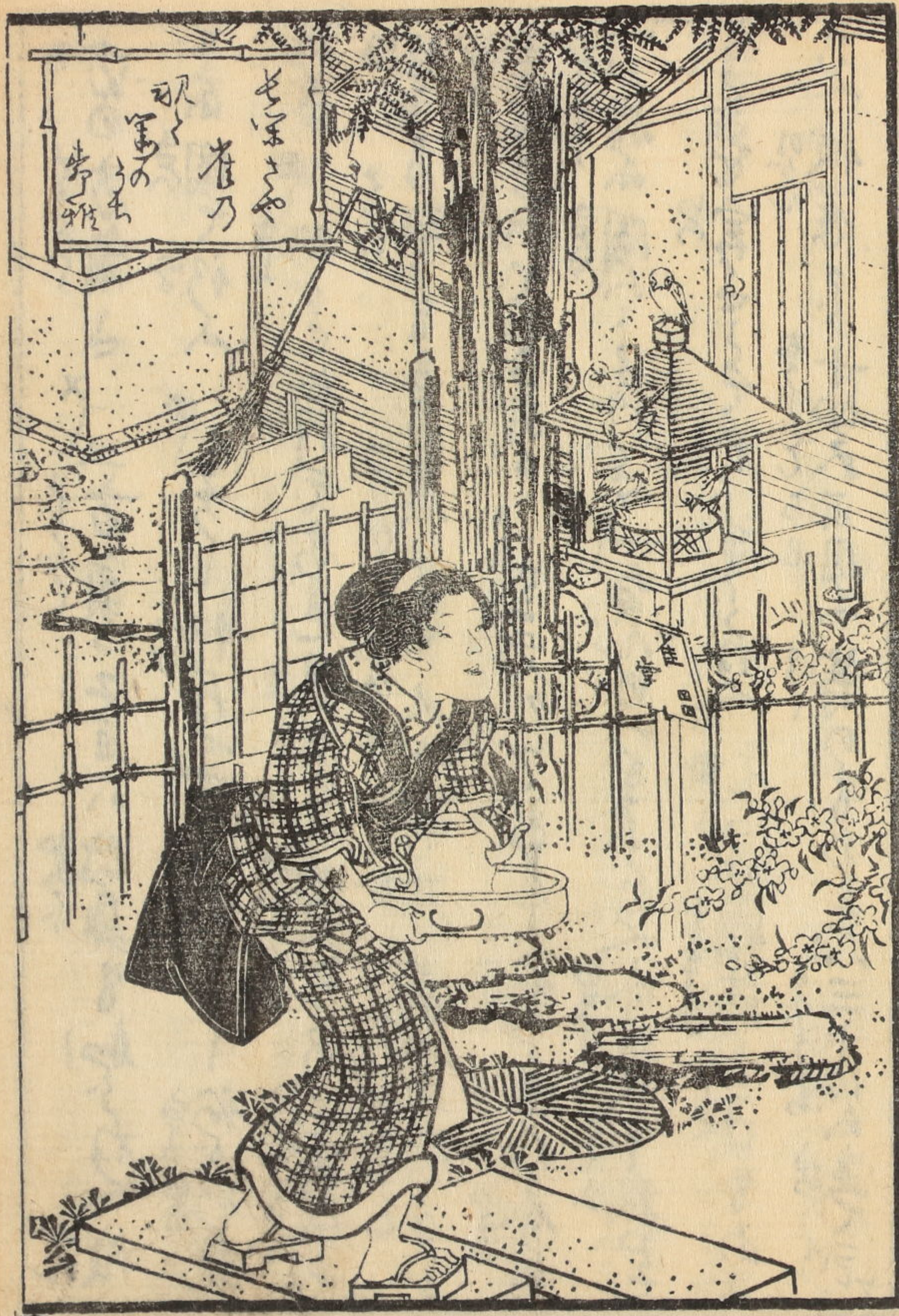


此の
 止
 福

止宿て
 見
 止宿て
 見
 止宿て
 見

方へは、さう折る、ある、三人連、さき、茶の、宿、
 止宿て、一休、休、さう、お置、が、連、と、供、の、人、の、夜、の、明、の、を、
 待、兼、て、ち、や、く、も、け、所、ま、で、早、ね、さ、う、け、お、分、ふ、立、止、ま、う、
 三人、へ、ち、や、さ、や、さ、さ、い、バ、ヤ、レ、ク、マ、ホ、ッ、ト、息、を、吐、か、う、と、
 平、え、い、ふ、も、早、く、お、園、ま、ん、へ、お、せ、極、ど、や、ア、わ、く、と、イ、ヤ、
 待、ま、せ、ん、お、い、て、あ、る、の、め、く、マ、け、平、る、村、ま、り、の、的、へ、欠、
 付、て、お、ま、ま、さ、ん、の、鳥、を、視、て、さ、一、人、先、へ、引、返、し、て、お、園、ま、ん、へ、
 知、ら、せ、う、が、い、ど、や、ア、わ、く、と、此、通、り、れ、を、お、い、て、早、く、も、先、が、

の後りゝお蔭で居るう智恵のひ子　左極りのうまや
 三人で坐もたそけい清く助より人の家へるでね
 更とはせう　左極り　供より　あはれ
 うら口が重く、前て草臥が出て来と極でうう　こ
 まじきけり、早ひせ何でもおまをさんみとそ逢わ
 中々ゆめいさなわん是う又お蔭りお蔭りゝい樹食
 山あふう　知事多ひのお放をこゝへ行くわん往々後と
 大にねむ　サア　お蔭りゝぶちやうねむぶ所うね



たうろつお園の形も露わらば曉方ふれと披露れ
思ふぞうろつ眠るが辰刻半頃ふ目を覚一四時を
見まば枕元の屏風の外ハ隣ふめてうろつ兩戸を明
たるゆゑままの目影のさう入て庭ふあづふ雲のなうろ
かゝ園えけまば早ふ起ぬる所へお竹の煙草盆を
持来り 早四月が覺まうろつ 一何れせうろつ
松まやア誠ふ露れまれ 一元人の何れろつ 一
衆人の先刻起まうて子三人の同伴ふあまさんと尋ふ出

四時二十分

まゐり二人の新聞さぬへあまさんの在家の早くおままは
ちびをうけてお面衣をまるとやておままろつ 一
左様久けまろつあづふ露入りて居る 一電の朝露を
びの山家へも元の毒どね 一 一五才二且那さぬ電の
通人ぞな入るうろつあまおお記とあま成と宜あま
まろつ 一今朝もまろつ元人があまのを待る 一信切の世
を成てまろつあまろつ 一 一左様久まろつあまの毒どね
一 一煙草を吞む庭をたうろつ 一 一お竹や清水をまろつ

